保育指導案作成の理解を深めるための取り組みについて

－附属幼稚園における体験学習の充実に向けて－

本　村　弥寿子

The action for a better understanding of childcare teaching plan created
−One toward the rich experience learning in over supplementary kindergarten−

Yasuko MOTOMURA

キーワード：体験学習　保育指導案　指導案作成

１．はじめに

保育者養成校で学んでいる学生にとって最も不安なことの一つは、幼稚園や保育園における学外実習である。慣れない環境の中で保育者として子どもと関わることができるのか、また、担当教員にどのような指導を受けるのだろうかと、毎年実習前にこのようなつぶやきが聞かれる。その中でも特に不安に感じていることが、保育指導案である。本学では、１年次後期に筆者が担当する「カリキュラム論」において３度作成を行うが、実際に目の前に子どもがいるわけではないため、何をどのように書けばよいのかの理解が十分でない学生が多くいる。

学生の保育指導案作成に対する不安感が軽減され、抵抗なく指導案作成に取り組めるようにするためにはどうすればよいのか。筆者は、この問題に対し、長崎女子短期大学研究紀要第40号において、『保育指導案作成の理解を深めるための一考察』として「カリキュラム論」の授業内容の考察を行った。その際、課題として挙がったことは、学生が保育指導案を作成するためには保育の現場、つまり子どもの実態や保育者の関わり等を理解しておくということである。そして、この課題を解決に導くために、附属幼稚園での体験学習を充実させることが必要であるとの考えに至った。

そこで本稿は、附属幼稚園における体験学習の３年間の取り組みを振り返り、学生が体験学習で得たものを、如何に指導案作成につなげているか探ることとする。

２．体験学習について

体験学習とは、学外実習の事前学習の一環として、幼児教育学科１年次に本学附属幼稚園で保育の現場を体験するものである。実際に子どもたちと関わりながら、園児・保育者・施設・設備の観察などを行い、保育者になるための意識・意欲を高めることを目指し、平成16年度(2004)から行っている。

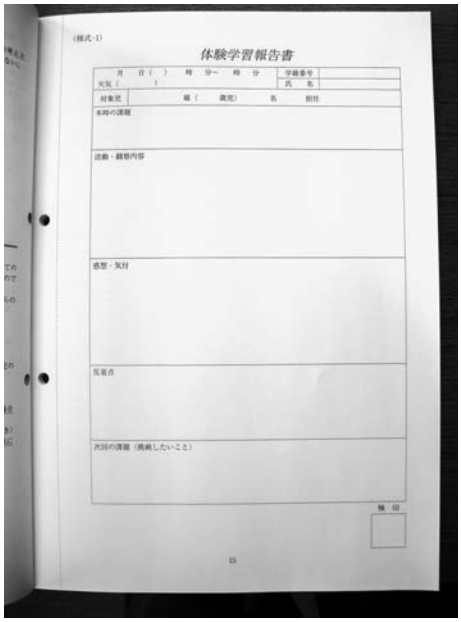
体験学習が開始されたのには理由がある。それは、近年少子化が進み、学生が日常的に乳幼児を見たり関わったりする機会が減少しているため、学生が実習先で子どもに声を掛けられなかったり子どもの周囲にいるだけであったりという姿が目立つようになったということからだ。これでは、学外実習の限られた日数の中で、保育者として必要な資質や能力を高めることは十分にできないだろう。そこで、次のような目的を掲げて体験学習を実施することになった。

〈体験学習の目的〉
①子どもの様子を知る。
②保育者の子どもへの関わり方を学ぶ。
③保育者になることについて考える。

２．１　体験学習の実際

体験学習は保育現場を学ぶものであり、現場である附属幼稚園の教育活動に支障のないように進めることが大切である。そこで、附属幼稚園と相談し、週に１回、９：00から10：00までの時間を体験学習として確保した。また、１年生約100名が一度に行うことはできないため、100名を５～６グループに分け、１グループ約20名ずつ行うことにした。附属幼稚園は６クラスあるため、学生は１クラスに３～４名ずつの配置となる。このようにして、一人の学生が１年次に３回体験学習を行うようスケジュールを組んで実践している。

先に述べた体験学習の目的を達成するため、３回の体験学習それぞれに学生に課す活動を示している。１回目は「子どもの観察、先生の関わり方の観察」、２回目は「子どもと関わる・遊ぶ、先生の関わり方の観察」、３回目に「実習の課題を意識して子どもと関わる・遊ぶ」ことである。学生は３回の体験学習それぞれにおいて、観察したことや実際の関わり、そこから考えたことや学んだことを図１に示す「体験学習報告書」に記入し、担当教員に提出している。


（様式-1）

体験学習報告書

月　日（　）　時　分～　時　分　学籍番号

天気（　）　氏　名

対象児　組（　歳児）　名　担任

本時の課題

活動・観察内容

感想・気付

気付点

次回の課題（挑戦したいこと）

検　印

図１　体験学習報告書

２．２　体験学習の成果

平成25年５月に、本学附属幼稚園の園長と教員、そして本学幼児教育学科教員で「体験学習打ち合わせ」を行った。これは、体験学習を開始して10年目を迎えるにあたり、学生を受け入れる附属幼稚園と送り出す短大が、それぞれの立場から感想や意見を出し合って、より一層充実した体験学習を行うことを目的として開いた会議である。その中で出された学生の姿として、１回目は不安や緊張が感じられるが、２回目、３回目と回を重ねるごとに学生の表情が良くなり、子どもに進んで関わっているということであった。また、体験学習報告書にも、子どもの姿や保育者の関わりに関して、回を追うごとに多くの気付きが記入されるようになり、保育の現場を知るという体験学習の目的は、ある程度達成していると思われた。

２．３　浮かび上がる体験学習の課題

年数を重ねるごとに、体験学習の課題も見えてきた。体験学習を開始した10年前と比較して、学生の乳幼児との関わりの経験値の低さが一層進んでおり、それまでの体験学習の内容では、学外実習までに理解や習得させたいことが十分になされないと感じられるようになったのである。一方、現場では保育者不足が叫ばれ、新規採用者に、保育者としてある程度完成した人材を求めるようになっている。そのため、実習生に対しても求めるものが高くなっているように思われる。

また、体験学習は学外実習の事前指導の一環という位置づけであるが、そこでの学びは他の科目にもつながるものである。保育現場を実際に見たからこそ、授業内容の理解が深まることが多いと考えている。筆者が担当する「カリキュラム論」での保育指導案の作成は、まさに保育や子どもの姿を想像しなければならないため、体験学習での経験がとても重要である。しかし、３回の体験学習で、しかも、常に同じ時間帯の観察で、保育指導案を作成するために必要な現場の様子を把握できるのであろうか。このような思いから、学外実習を含む様々な科目での学びを深めるために、体験学習のあり方を見直すことが必要と考えた。そして、平成28年度（2016）より、附属幼稚園との連携の下、新たな取り組みを試みた。

以下に、平成28年度から実施している体験学習について振り返り、学生の指導案作成や様々な学びとのつながりを押さえていきたい。

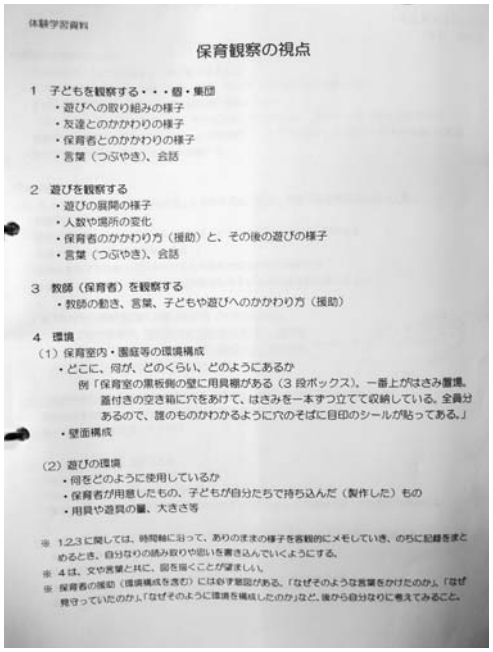
３．体験学習の新たな取り組みについて

３．１　内容

３．１．１　第１回目「１日観察」

学外実習でまず学生が行うことは、実習園を知ることである。どこに何があるのかといった園の環境や一日の流れをまず把握しなければならない。細かな部分は園によって異なるが、大まかなものは共通している。そこで、体験学習では、１年次の前期、１回目の体験学習で、附属幼稚園を１日観察する内容を取り入れることにした。

本学の幼児教育学科では、１学年を２クラスに分けている。１クラスは、50～60名である。「１日観察」は、このクラスごとに行うようにした。ほとんどの学生にとって初めての保育現場であるため、観察の視点が明確でない学生が多い。そこで、事前にオリエンテーションを行い、保育観察の視点（図２）を伝えた。そして当日、子どもや保育者を観察の視点をもとに観察し、１日の流れに沿って観察記録（図３）をまとめることを課題とした。観察記録は観察した内容を客観的に書くものであるため、感想や気付き等自分の思いをまとめるために、前年度までと同様に「体験学習報告書」（図１）も記述させた。これらは、保育をどのようにみるのかを学生が理解できるようにすることをねらって取り組んでいる。また、実習日誌等記録物の書き方に慣れるための第一歩となることも期待した。


体験学習資料

保育観察の視点

1　子どもを観察する・・・個・集団
・遊びへの取り組みの様子
・友達とのかかわりの様子
・保育者とのかかわりの様子
・言葉（つぶやき）、会話

2　遊びを観察する
・遊びの展開の様子
・人数や場所の変化
・保育者のかかわり方（援助）と、その後の遊びの様子
・言葉（つぶやき）、会話

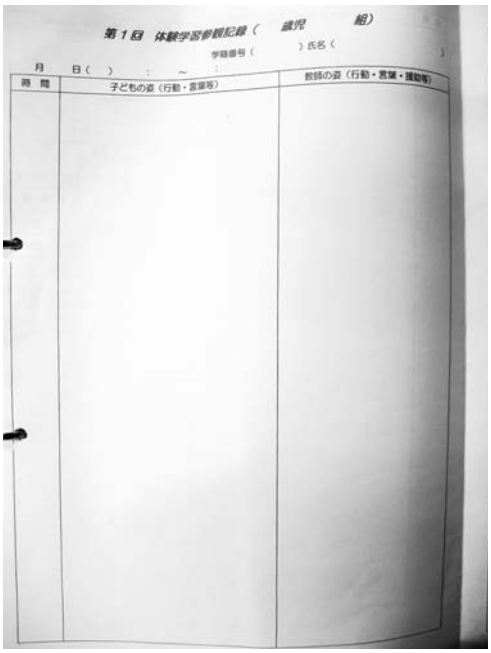
3　教師（保育者）を観察する
・教師の動き、言葉、子どもや遊びへのかかわり方（援助）

4　環境
（1）保育室内・園庭等の環境構成
・どこに、何が、どのくらい、どのようにあるか
例「保育室の黒板側の壁に用具棚がある（３段ボックス）、一番上がはさみ置場。蓋付きの空き箱に穴をあけて、はさみを一本ずつ立てて収納している。全員分あるので、誰のものかわかるように穴のそばに目印のシールが貼ってある。」
・壁面構成

（2）遊びの環境
・何をどのように使用しているか
・保育者が用意したもの、子どもが自分たちで持ち込んだ（製作した）もの
・用具や遊具の量、大きさ等

※ 1,2,3に関しては、時間軸に沿って、ありのままの様子を客観的にメモしていき、のちに記録をまとめるとき、自分なりの読み取りや思いを書き込んでいくようにする。
※ 4は、文や言葉とともに、図を描くことが望ましい。
※ 保育者の援助（環境構成を含む）には必ず意図がある。「なぜそのような言葉をかけたのか」、「なぜ見守っていたのか」、「なぜそのように環境を構成したのか」など、後から自分なりに考えてみること。

図２　「保育観察の視点」


第１回　体験学習参観記録（　歳児　　組）

学籍番号（　　）氏名（　　）

月　日（　）：　～　：

時間	子どもの姿（行動・言葉等）	教師の姿（行動・言葉・援助等）

図３　「観察記録」

保育は、保育の専門家が行う教育活動である。よって、単に子どもの世話をするだけでなく、ねらいをもって計画を立てては環境を構成し、日々の反省を基に、さらにより良い保育を目指して計画を立て実践していくことを繰り返し行うものである。決してその日その日の成り行き任せのものではない。このことは、１年次後期の「カリキュラム論」で学び、保育指導案作成へと学びを進めるようにしている。

「１日観察」は、上記のような保育の過程に学生が触れる良い機会であるとも考えた。この時点では理解が十分にはなされないだろうが、保育が計画を基に行われている点をこの機会に知ることで、その後の学びが実感を伴うものになるのではないかと考えた。そこで、附属幼稚園の担任教員に指導案作成を依頼し（図４）、学生が指導案をもとに保育観察を行えるようにした。「１日体験」の最後には、附属幼稚園の学年主任３名が当日の

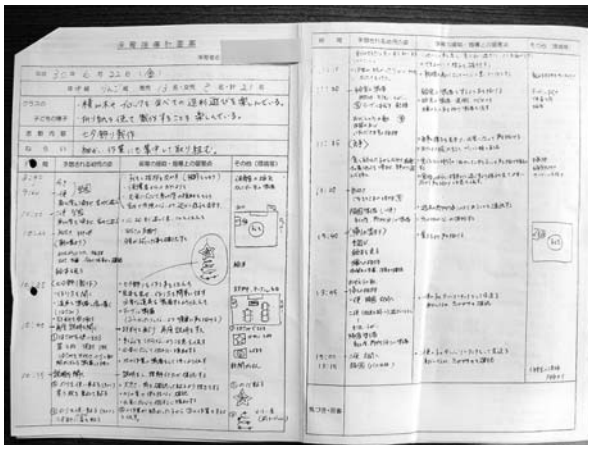


図４　「１日観察」の指導案

保育について指導案を踏まえて説明し、学生からの質問に答える時間として約30分間設けた。

３．１．２　第２回目「子どもと関わる」

第２回目は、従来通りの内容である。第１回目の「１日観察」で捉えた子どもの様子を踏まえて子どもと関わり、会話したり遊んだりして更なる子ども理解をねらっている。さらには、保育者と子どもの関わりを観察し、子どもに応じた関わり方や援助についてさらに理解を深めてほしいと考えている。

この回は、第１回目と異なる年齢のクラスに３～４名ずつ入り、９：00～10：00に行う。登園時間帯であるため園児が全員そろってはいないが、学生がじっくりと子どもにかかわるには程よい人数であると思われた。事後は「体験学習報告書」（図１）を記入し提出する。

３．１．３　第３回目「学生による保育実践」

第３回目は１年次後期のさらに後半に行われる、最後の体験学習である。２年次６月には教育実習が入り、すぐに保育を経験することになる。そのため、この体験学習で、実習の心構えと保育を行うという自覚を持たせるために、10分程度ではあるが学生一人一人が保育実践を行う機会を設けることにした。

事前にオリエンテーションを行った。保育実践の目的や取り組みの流れを説明した後、同じクラスに配当される学生３～４名でグループを組み、それぞれが実践する内容と流れなどについて打ち合わせを行わせた。そして、打ち合わせ内容を基に一人一人が簡単な活動案（図５）を書いて、実践日の１週間前までに当日の引率担当教員の指導を受けるようにした。担当教員の指導は、学生が保育を綿密に練り上げしっかりとシミュレーションできるようにという点に配慮して指導した。すでに２回の体験学習を経験しているとはいえ、初めて学生が実践する保育である。どの場面でどこにどのように材料を置くのか、指示はどのタイミングで出すのか等、細かな部分に学生が気付き、不安感を必要以上に抱かないよう配慮した。これが、今後の実習やその他の学びに意欲を持って取り組むことや、保育に対する理解を深めることにつながると考えている。

実践後は、事前に書いた活動案に、実際の様子を書き加え、「体験学習報告書」（図６）と共に提出させた。附属幼稚園の担任からも、学生の実践に対する気付きや助言等が各クラス一枚の紙面（図７）で配布されたため、報告書とともに学生へ返却し、自身の保育を見つめ直して、次の実習に生かせるようにした。

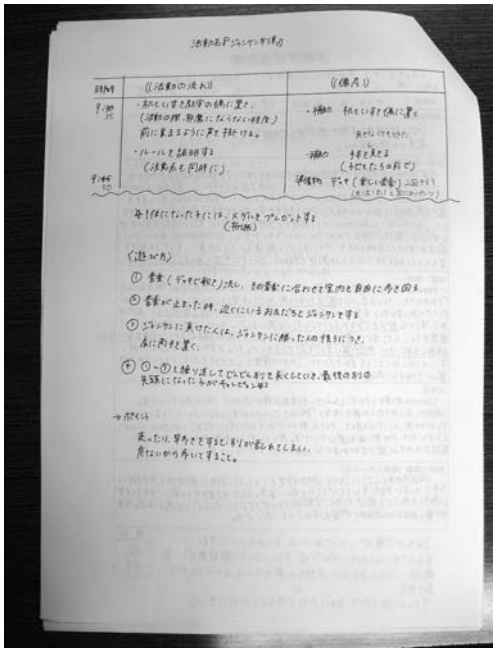


図５　学生が作成した活動案

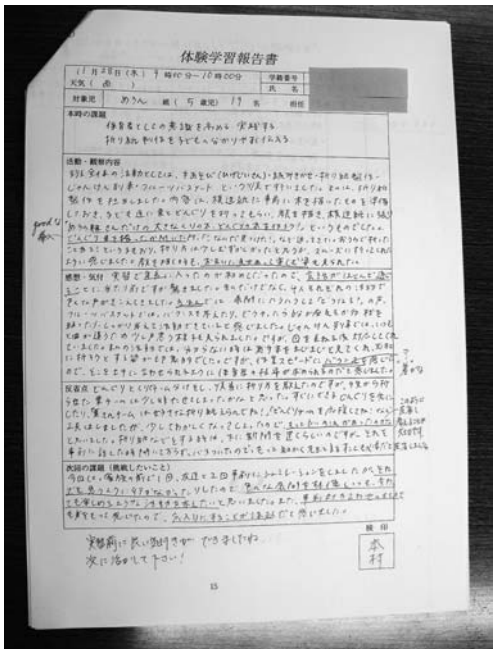
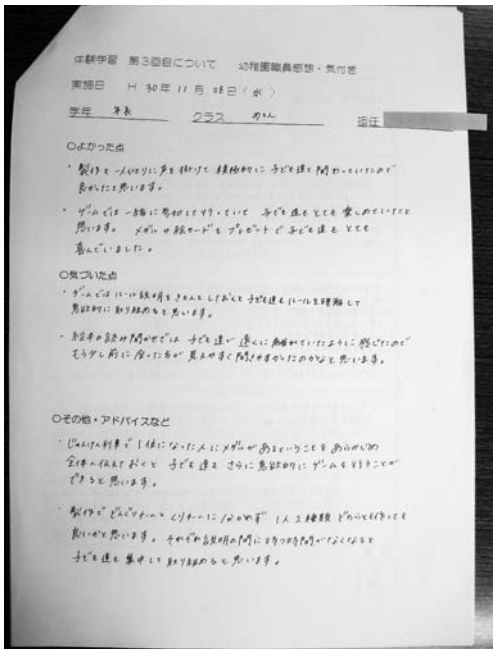

体験学習報告書

図６　第３回体験学習報告書


体験学習　第3回目について　幼稚園職員感想・気付き

実施日　H 30年 11月 28日（水）

学年　本科　クラス　めうん　担任

○よかった点

・製作も一人ひとりに声を掛けて積極的に子どもに関わっていたので良かったと思います。

・ゲームでは一緒に考えてやっていて子ども達もとても楽しんでいたと思います。メダルや絵カードをプレゼントで子ども達もとても喜んでいました。

○気づいた点

・ゲームでは1つ1つ絵カードをきちんとしておくと子ども達もルールを理解して意欲的に取り組めると思います。

・お茶の会の時間帯では子ども達が遠くに離れていたように感じたのでもう少し前に座ったほうが集中して聞けるのかなと思います。

○その他・アドバイスなど

・じゃんけん列車で1体になった人にメダルが渡るというこのあみだくじの全体が見えておくと子ども達はさらに意欲的にゲームを楽しむことができると思います。

・製作でどんぐりやつるとりやっぱりに分けずに1人2種類どれかでもやっても良いかと思います。それぞれ説明の間にそれぞれの時間がかかるので子ども達も集中して取り組めると思います。

図７　附属幼稚園教員の感想・気付き

３．２　成　　果

この体験学習では、本学入学から３か月目にして観察記録を書くなど、内容・量ともに力を入れざるを得ない状況になる。新しい取り組みを試みて３年が過ぎたが、毎年学生が自分なりに精一杯取り組んでいることを感じている。

第１回目の「１日観察」では、ほとんどの学生が初めて保育現場に１日いるということで、様々な発見をしている。報告書の感想では、「園児自身ができることは、できるだけさせてあげている。何でも保育者がしてあげるのではなく、見守ってあげることも大切ということを実感した」「どんな時でも、子どもたちの行動に気付いて反応してあげることが重要だと思った」「年少組さんの前に、年少々さんの部屋を見た。歩き方や話し方、身長を見て、１年でこんなにも成長するのかと子どもの発達に感動した」と言った内容が見られた。

第２回目の「子どもと関わる」では、「何て話しかけたらいいか分らず、困った」「自分の話が伝わっていないような感じだった」といった子どもと関わることへの戸惑いや難しさの感想が見られた。しかし一方、「絵本を熱心に聞いてくれてうれしかった」「折り紙を久し振りにやって楽しかったし、子どもが折り方を丁寧に教えてくれて『すごい』と思った」という感想もあり、子どものかわいらしさや素晴らしさなどを感じていることが伝わった。

第３回目は、「学生による保育実践」である。報告書には、「活動の始め方が難しく、声かけが分からなかった。あらかじめ考えておくことが必要だった」「ゲームのルールをどのようにすれば子どもに理解してもらえるかを考えなければならないと思った」「途中で泣き出したＡちゃんにどう対応すればよいか分らなかった。いろいろな場面を想定しておかなければならないことが分かった」という反省や課題が記述されていた。これらの感想は、明らかに１・２回目の体験学習の感想より深まったものになっている。つまり、保育者として行うべき保育の振り返りが行われている。これは、10分ほどの実践であっても、学生自身で子どもにふさわしい内容を選び、子どもの興味関心を引き出すような提示方法などを熱心に考えて取り組んだからこそであろう。

４．指導案作成に向けて

「体験学習」の新たな取り組みについて振り返ると、その目的の「子どもの様子を知る」「保育者の子どもへの関わり方を学ぶ」「保育者になることについて考える」の達成に向かったものに

なっていると感じる。これを、確実に指導案作成にどのようにつなげていけばよいのだろうか。以下に、第３回目の体験学習の報告書の記述を見てみる。

〈保育の流れについて〉
・すぐに（主たる）活動に取り組むのではなく、手遊びなど子どもがこちらに気持ちを向けやすいものを入れるべきだった。
・どのタイミングで次の指示を出せばよいのか分らなかった。
・絵本の後、どうしたらいいのか分らず、頭が真っ白になってしまった。
〈環境について〉
・絵本の読み聞かせの時、子どもと同じ床に座って見せてしまった。途中で担任の先生に椅子に座るよう声をかけていただいた。
・子どもが糸を持つと、長くて作業がやりにくそうだった。子どもが作業しやすい長さにしておくべきだった。
・子どもから「かくれんぼしたい」と声が上がったので遊んだら、机の下に隠れた子の髪が机に挟まってしまった。保育室ではなく、外でした方が良かったのかなと反省した。
〈子どもとの関わりについて〉
・絵本の途中で話す子どもがいて、返事をしてあげたほうがいいのか、スルーした方がいいのか分らなかった。
・手遊びでも子どもによっていろいろな仕方があることが分かった。今後、子どもの意見も聞いて取り組んでみたい。
・興味の度合いが子どもによって違っていて、どう対応すればよいか分らなかった。

保育は自分の思っているように進まないことが多いものである。だからこそ、「こうなるかもしれない」と様々な様子をあらかじめ想像しておき、その場で慌てずに対応していくことが必要である。しかし、保育の初心者である学生には、様々な様子を想像することが難しい。どのように活動を進めていくかを考えるだけで精一杯である。

これまで学生は、実習で指導案を作成して保育を実践し、ようやく上記のような気付きを得られる状況であった。しかし、新しい体験学習の取り組みにより、保育の様々な様子とその対応を事前に考えておくことが大切であると学生は実感することができている。この実感を「カリキュラム論」での指導案作成時に思い起こさせることが重要であると考える。体験学習で観察した子どもたちの様子を思い起こしながら指導案を作成することに慣れておくことで、実習においてクラスの子どもの姿を基に保育を考えることが速やかになされるだろう。

５．おわりに

平成28年度からの新たな「体験学習」の取り組みにより、保育や子どもの様々な様子を想定して保育の計画を立てることが大切であることを、学生が実習前に実感できるようになった。すべての学生の「体験学習」での学びを把握することは困難であるが、「体験学習報告書」を基に、学生の学びや思いを捉え、それを学生に還元しながら指導案作成に取り組ませるよう、「カリキュラム論」の授業内容を見直していきたい。そして、「体験学習」が、その後の学生の様々な学びにどのような影響を与えているのか調査し、より良い「体験学習」の取り組みにつなげていきたいと考える。

参考・引用文献

１）本村弥寿子（2016. 3）保育指導案作成の理解を深めるための一考察　長崎女子短期大学紀要　第40号　p31～37